

b. 所得決定のグラフ的表現 ((貯蓄・投資の所得決定図式)) <要旨>

第3・3図

消費関数: $C = (\text{限界消費性向}) \times (\text{所得}) + (\text{基礎消費}) = 0.8Y + A$

$$\therefore \Delta Y = \{1/(1-0.8)\} \Delta I = 5 \cdot \Delta I$$

総支出 = $C + I$

45° 線上で、総支出と総生産（ないし所得）が均衡する。

総支出 = 総需要に一致するように総生産（純付加価値）が増加

→ 総需要への販売 → 総生産と同額の所得

$I = 10$ のとき $\{\Delta Y = 50, Y = 50 + 50 \text{ より}\} Y = 100$

$I = 20$ のとき $\{\Delta Y = 100, Y = 50 + 100 \text{ より}\} Y = 150$

投資乗数 = 消費乗数

投資も消費も同じ「需要」であり、乗数効果の側面では同じ効果をもつように理論が仕組まれている。

例：基礎消費 A が ΔA だけ増加すると、所得は $\Delta Y = \{1/(1-0.8)\} \Delta A$ だけ増加。 ΔI とおなじ。

→ $\{1/(1-0.8)\}$ は投資乗数にも消費乗数にもなる。

補足：基礎消費が ΔA だけ減少すれば（たとえば非自発的失業者の増加により）、 ΔY

は $\{1/(1-0.8)\} \Delta A$ だけ減少するはずである。=>表を参照

第3・3図 所得決定の単純モデル

